

## 論文の内容の要旨

論文題目：日本、朝鮮、中国の近代にみるゼロト主義の論理  
——攘夷論と守旧論に関する比較研究——

氏名：藤田雄二

「ゼロト主義」とは、トインビーが『歴史の研究』の中で用いている用語である。二つの文明が遭遇した時に、劣勢な側が示す反応パターンのひとつで、彼我の優劣を顧みず、自らの文明を固守しようとするものを、彼はこの名で呼んでいる。本論文ではこれを、19世紀に日、朝、中三国の政府が、西洋諸国の開国要求を受け入れ、その文明を取り入れて生き残りをはかろうとした際に、それぞれの国でなされた異議申し立てとしての、攘夷論と守旧論の総称として借用している。

一般にゼロト主義は、「ヘロデ主義」（これもトインビーの用語で、上述した政府の対応のような反応パターンを指す）の対極にあるものとして、「盲目的」とか「情緒的」といったイメージでとらえられる。その根底には、ヘロデ主義的対応は合理的でゼロト主義的対応は非合理的だという理解がある。従来のゼロト主義の事例に関する研究は、「盲目」性の理由を無知に求めるもの、同じく心理的抵抗に求めるもの、「盲目的」行動に至らしめた外国の侵略の方に理由を求めるもの、さらに特定の事例の「盲目」性を否定しつつ（例えば隠された意図があったのだというように）、それを例外として位置づけるものという、四つのタイプに類別されるが、これらはいずれも上の理解を前提としており、それを根本的に見直すものではない。本論文の目的は、その根本的な見直しを行なうことにある。

本論文では、ゼロト主義もヘロデ主義と同様に一種の現実主義であったという見方に立つ。ヘロデ主義の主張は一見合理的に見えるが、実はそれが拠って立つ論理には盲点があり、現実の半面が隠蔽されている。そして、その隠蔽された半面をゼロト主義の主張は足

場としている。ヘロデ主義の主張がゼロト主義の主張によって覆すことのできないものであるように、ゼロト主義の主張もまた、ヘロデ主義の主張によって覆すことはできない。どちらが真に合理的であるかは、一義的な決着のつかないようになっている。そういう関係に両者はあることを本論文では論じる。

この他、本論文では三国のゼロト主義の比較も行なう。従来は、三国の比較と言えば、各国の支配層の性格の違いなどを変数として、主として日本と朝中両国の対比に重点を置いてなされてきたが、本論文ではこれを継承しつつも、もうひとつの変数として、三国の人々が抱いていた自己イメージ、すなわち自国の能力についての認識の相違に注目し、この点から見た朝鮮と中国の対比にも光を当てる。

本論は三部構成となっており、それぞれに一般的考察と事例研究の章が置かれている。各部の内容は以下の通りである。

まず、第1部では、三国のゼロト主義に共通する論理を中心に考察する。事例研究では、日本のゼロト主義の代表として、尊王攘夷運動の主張を取り上げる。

ゼロト主義の主張の論理は、ヘロデ主義の主張の論理と鏡像的關係にある。ゼロト主義的対応によって国を保つのは不可能だという主張が、後者の支柱をなしているのと同様に、ヘロデ主義的対応によって国を保つのは不可能だという主張が前者の支柱をなしている。ゼロト主義的対応によって国を保つことは可能だという主張は、この主張を前提とした、言わば添え物に過ぎない。後の主張を覆すのは一般に容易だが、前の主張を覆さない限り、ゼロト主義の主張を覆したことになる。

ゼロト主義的対応によって国を保つのは不可能だという主張が、西洋文明の優越性の認識に基づいているのに対して、ヘロデ主義的対応によって国を保つのは不可能だという主張は、自国の政府や臣民に対する不信に基づいている。西洋文明の優越性が否定しがたい現実であるように、自国の政府や臣民に対する不信もまた、当時の現実を反映しており、否定するのは極めて困難である。ヘロデ主義的対応によって国を保つのは不可能だという主張は、もっぱらこの不信のみを根拠としており、それ自体としては彼我の優劣に関係なく成立する。したがって、いかにヘロデ主義者が西洋文明の優越性を強調しようとも、それだけではこの主張、ひいてはゼロト主義の主張を覆すことはできない。

ヘロデ主義的対応によって国を保つのは不可能だという主張の代表的な論点としては、まず第一に、戦争を避ければ人々は安心して自強のための努力をしなくなるとするもの、第二に、西洋文明を学びながら同時に自国への忠誠心を保つことを人々に要求するのは無理だとするもの、第三に、衰廃した自国社会においては西洋では問題なく機能する技術や制度も満足に機能しないとするものがある。日本の尊王攘夷運動においては、中でも特に第一の論点が主な論拠となった。自強のためにこそ攘夷が必要なのだというのが、日本の攘夷論者が最も強く主張したことであった。明白な軍事的劣勢にもかかわらず、彼らが攘夷に執着したのはそのためである。じっさい、まともに戦って勝ち目がないことは、彼ら

は十分に認識していた。

次に、第2部では、三国の比較を中心に考察する。事例研究では、朝鮮のゼロト主義の代表として、衛正斥邪派と東学信徒の主張を、さらに中国のゼロト主義の例として、アヘン戦争から日清戦争に至る主戦論と、洋務・変法運動に対する反対論、さらに仇教運動と義和団の主張を取り上げる。そして最後に補足として、再び日本の例を取り上げる。

朝、中両国と日本との相違は、自強に対する姿勢の相違としてとらえることができる。日本のゼロト主義者は概して自強に積極的であったが、朝鮮と中国のゼロト主義者は逆に概して自強に消極的であった。日本のゼロト主義者は自強の追求をすべてに優先させ、そのために西洋文明の採用に対して結局妥協的な態度をとったのに対して、朝鮮と中国のゼロト主義者は、妥協をするよりもむしろ自強の追求を放棄し、それに代わる道を求める方を選んだ。

朝鮮と中国で異なるのは、自強を放棄するにあたって支えとした拠りどころである。朝鮮の場合は、それは儒教国としての純粹性（東学信徒の場合は東学）であった。朝鮮の衛正斥邪派は、儒教の道徳的な力によって西洋の軍事力に対抗しようとした。そのため、儒教を徹底して保つことが彼らの死活的な関心事となった（東学信徒の場合は、東学信仰によって得られる超自然的な力によって西洋に対抗しようとした）。これに対して、中国の場合は、排外的民衆の力が自強に代わる拠りどころとなった。中国のゼロト主義者、特に守旧的主戦論者は、民衆の数の力によって西洋の軍事力に対抗しようとした。そのため、民衆の心を朝廷につなぎとめることが彼らの死活的な関心事となった。

この相違は、両者の自己イメージの違いと関係している。朝鮮では自国は辺鄙な弱小国であるというイメージが一般に定着しており、それが自国が力で西洋に対抗するのは所詮無理だという諦観につながった。一方、これとは対照的に、中国では自国は無限の力をもった大国であるというイメージが一般に定着しており、それが自国の国土と人口をもってすれば、特別に自強を追求せずとも十分西洋に力で対抗できるという余裕につながった。

日本では、地理的特性のため、さらには鎖国政策によって外界との交通が制限されていたために、自国の規模が感得されにくく、それゆえ朝鮮や中国のような安定した自己イメージが形成されなかった。だから、上のような諦観も余裕も日本のゼロト主義者にはもちようがなかった。日本のゼロト主義者が自強に積極的だったのは、彼らが武士であったということからひと通り説明できるが、別の角度から見れば、自国の能力について諦観も余裕ももてなかったために、ひたすら自強を追求する以外に道が見出せなかったのだと解釈することもできる。

最後に、第3部では、ゼロト主義者のヘロデ主義への転向について考察する。事例研究では、日本の松平慶永と中岡慎太郎の転向の例と、さらに参考例として馬関戦争の例を取り上げる。

従来は、西洋についての認識の深まりがゼロト主義者の転向を可能にすると考えられて

きた。しかし、第1部の考察からすれば、それだけでゼロト主義者が転向することはない。転向の真の条件は、ヘロデ主義的対応によって国を保つことは可能だという確かな見込みが得られること、とりわけ、そういう期待をもたせるような、抜本的な内政改革が行なわれる確かな見込みが得られることである。じっさい、日本の松平慶永の場合には、雄藩連合政権の構想が転向を決定づけている。また、中岡慎太郎の場合には、内戦によって国内政治の活性化ができるという発見と、さらには台頭した薩長勢力への期待が攘夷論の清算を可能にしている。他方、攘夷運動の転機としてしばしば引き合いに出される、馬関戦争での敗北は、実際には攘夷論者の考えにほとんど何の変化ももたらしていない。

日本では、ヘロデ主義的対応によって比較的順調に外圧に対応できたという歴史的経緯があるため、とかくヘロデ主義者の方が賢明であったかのように見られやすい。しかし、それは結果を知っているが故の錯覚に過ぎない。本当はただ、彼らは厄介な問題を解かずに避けて通っただけであったことが、以上の論述を通じて示されるであろう。